黒島への離島巡回診療同行実習

伊東　聖吾

今回、離島巡回診療同行実習として、三島村の黒島に同行させて頂いた。自分は数年前に三島村の硫黄島に行ったことがあり、離島の環境がどのようなものかは知っていたが、そこで歯科医療をどのように行うのかは分かっておらず、この実習には非常に興味があった。

黒島へは 6 時間弱の船旅で、船は途中、竹島と硫黄島を経由した。黒島では平地があまりなく、ほとんどの道がかなり急な坂道になっている。ここでは高齢者も多く見られ、坂道の多いこの環境では生活が大変そうに思われた。

診療を行う大里ふるさとセンターに到着して直ぐにセッティングを開始した。センター内の診療所にある歯科チェアの周りにこじか号からおろしたポータブルのバキューム等を展開したが、バキュームのポンプが故障して動かないというアクシデントに遭遇した。代替として、後始末用に持参した掃除機をバキュームのポンプ代わりに使うことにした。掃除機とポータブルを接続するコネクタを用意してあるところから、以前にもポンプが壊れたことがあったのかもしれないと思った。この掃除機は古い機種で、診療中に使った場合は患者と会話が出来ないくらいの騒音が出ていた。セッティング終了後、2 階にて同時進行で行っていた講話会に参加した。講話会では予防、歯周病の話が中心であり、この話と同時に島の子供達の歯科診療と歯磨き指導、フッ素塗布を行った。子供達のうち数人に齲蝕の見られる子がいたものの、離島巡回診療で定期的に検診を行っているためか、極端に進行している子はいなかった。

翌日は朝 8 時半から診療を開始、全部で 10 名程度の患者を診た。診療開始前には同行した県歯科医師会の事務の方により既にバキュームのポンプが修理完了しており、無事に診療を行うことが出来た。こじか号の車内は診療するにはとても狭く、スタッフは 4 人(Dr、DH×2、研修医)でいっぱいとなり、自分はあまり入ることが出来なかった。この狭いスペースにもかかわらず、こじか号ではデンタル撮影や滅菌まで出来るのには驚いた。デンタル撮影中は防護カーテンをそのたび展開していたのが印象的だった。

衛生士や先生もこの島に何回か来ているので、地元の人と顔見知りであった。診療所に薬を貰いに来た地元の人と話をしつつ、「お口の検査をしませんか」と声をかけたりしていた。そのおかげで予約よりも多く診療を行うことが出来、診療終了予定時間を延長した。これが離島診療をうまく回すコツではないだろうかと感じた。地元の人と継続して仲良くしていかないとこのようなことは出来ないであろう。結局 1 時間遅れて撤去作業を開始、終了後に次の目的地である片泊に移動した。移動するために使用する車が荷物のためスペースが無く、研修医と我々学生の 3 人はこじか号に乗せてもらった。こじか号に乗る機会は他に無いので、これはとてもいい機会であった。

次に診療を行う片泊ふれあいセンターではデンタルチェアの椅子部分のみのものが置いてあり、これを畳部屋に運んで使用した。このチェアの周辺にポータブルの機器を並べた。ここでは 10 人弱の患者が来院したが、そのうち半分は義歯調整であった。調整後、不満が解消されたときの患者の笑顔がとても印象的だった。診療時間終了後、講話会と歯磨き指導を行った。レッドコートが上顎前歯の全面に残っていた子がおり、歯磨きの仕方を教えたが次の歯磨き指導の時まで覚えてくれるかどうかが気がかりであった。他に歯ブラシの毛が広がりすぎてタワシのようになっている子もいた。離島では簡単に歯ブラシを入手出来ないので、離島巡回診療で歯ブラシや糸ようじなどを販売したのはとても良い機会であると思った。

最終日は台風の接近により、1 時間早く片泊港から出港した。離島は移動や食糧事情も含めて、様々なことが自然に強く影響を受けることを感じた。帰路途中の竹島で診療スタッフとこじか号は下船し、我々学生と別れた。

今回はこのような機会を設けて頂いて、非常に感謝している。僻地での診療は、地元の方々とのコミュニケーションと、限られたリソースをいかに有効に使うかがとても大事であることが良く理解できた実習であった。開業医であれば特に地元に根付いた診療を長く続けて行っていくことが大事だと思われるので、今回のこの経験を生かしていきたいと思った。

離島巡回診療実習について（三島村―黒島）

渡辺　航太

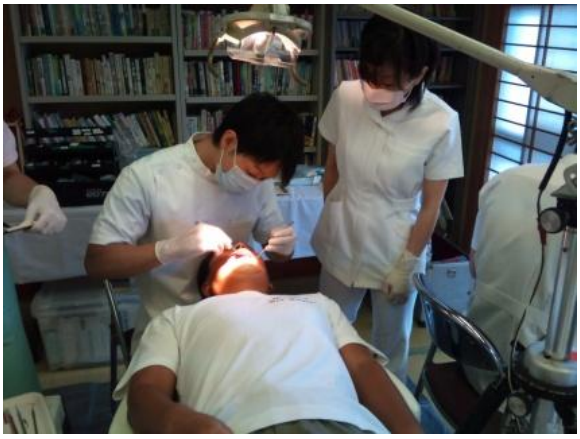
窓から朝日がそそぐなか、不安と期待でなかなか眠りにつくことができなかった私だったが、不思議とスッと目が覚めた。申し分のない天気。出発の日、黒島とはいったいどんな所なんどろうか、多くの患者さんが来てくださるのだろうか、などの多くの思いを胸にフェリーに乗り込んだ。ガチガチに緊張していた私を、錦江湾を優雅に泳ぐイルカが出迎えた。

９月６日から９日までの４日間、鹿児島の離島である黒島に離島巡回診療の臨床実習の一環として同行した。種子島や屋久島などの大きな島でさえ行ったことのなかった私にとって離島に行くことには大きな不安があった。しかし、鹿児島の離島での歯科治療の実態はどうなっているのだろうか、歯科医師のいない地域ではみなどのような口のケアをしているのだろうかなどに興味を持ち鹿児島大学特有のこの実習に参加した。

フェリーは６時間ほどで島に着いた。美しい自然に囲まれ、自然と人がみごとに共存している生命力にあふれる島であった。島での生活はほとんど不自由なく、島の人々はとても優しくしてくださった。

２日目からは診療も始まり、自分の離島に対する認識と、実際の離島における歯科の実態は大きくかけ離れていた。私は、離島ではなかなか歯科診療ができず、多くの人が何らかの問題を抱えていると思っていた。しかし実際には島の人々は本当に口のケアに対して熱心で、多くの人が口腔内に問題を抱えていないことが分かった。また、積極的に本土に渡って治療を行ったり、予防に対して十分な知識を持っていた。今回の診療でも、重症の患者さんはほとんど来ず、多くが検診や義歯の違和感などの軽い症状のものであった。それほど島の人々は歯科に対して十分な認識を持っていた。

診療について私が驚いたのは、巡回診療チームの手際の良さとチームワークであった。診療器具は組み立て式で水が出なかったり、うがいの場所が無いなど不自由も多少あったが、そんな診療場でもしっかり患者さんの要求に答え、各人が自分の役目をしっかり持ち手際よくすることで、治療においては大学と何ら変わらない医療を提供できていた。患者さんも満足そうであり、私にとっても有意義な時間を過ごせた。



（・・歯周検査中・・）

３泊４日の実習では、同行した先生方や衛生士さんから多くの情報を聞くことができ、特に民宿では食事時や夜の親睦会の時にとても多くの情報を知ることができた。このよう

に先生方と宿で共にすることで歯科医師として今後どのように過ごしていけばよいかなど、大学だけでは決して経験することのできない深い話をすることができたのも今回貴重な体験となった。

最後に、親身になってご指導してくださった先生方、円滑な治療のためには不可欠であった衛生士さん、様々な段取りと島の多くのことを教えてくださった歯科医師会の方々、本当にありがとうございました。今回の貴重な体験は私を大きく成長させてくれたと思います。このような体験ができ、心から感謝しています。

（診療巡回チーム集合写真）

（実は観光もする！）